

# 清儒俞曲園とその金剛經注 (二)

福 島 俊 翁

## 四

俞曲園の金剛經に對する態度の概要は已に述べた通りである。而して彼は金剛經の本文を仔細に検討して、自ら舊套に據らず新に獨特の分段を立て、後人竄入の章句を辨じ、一貫した思想の上に本文の解説を試みたのであるから、吾人は今之を覗ひ知るべく、聊か煩瑣の嫌はあるが、以下本經の經文をも並舉して曲園の所説を紹介して見ようと思ふ。

### 上篇第一節。

如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。與大比丘衆千二百五十人俱。爾時世尊食時著衣持鉢。入舍衛大城。乞食於其城中。次第乞已。還至本處飯食訖。收衣鉢洗足已。敷座而坐。

(法會因由分第一)

時長老須菩提。在大衆中。卽從座起。偏袒右肩。右膝著地。合掌恭敬而白佛言。希有世尊。

如來善護念諸菩薩。善付囑諸菩薩。世尊。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。云何應住。云何降伏其心。佛言。善哉。善哉。須菩提。如汝所說。如來善護念諸菩薩。善付囑諸菩薩。汝今諦聽。當爲汝說。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。應如是住。如是降伏其心。唯然。世尊。願樂欲聞。(善現啓請分第二)

俞曲園は以上の文を以て第一節となし、須菩提が佛に向つて「應に云何んか住し云何んか此心を降伏すべきや」と發問し、佛は「應に如是に住し如是に其心を降伏すべし」と答へ給うた。これ本經の主旨であつて、こゝに云ふ心とは、所謂阿耨多羅三藐三菩提心である。住とは此心に住し、降伏とは此心を降伏するので、二心あるものではない。能く住すれば則ち能く有で能く降伏すれば能く無である。之を俗解の如く真心を安住し妄心を降伏すると云ふ如く分つて二とすれば全く其旨を失ふことになる。述べてゐる。此の考については吾人已に述べ來つた所であつてこゝに再説する要はあるまい。

次に彼は第二節として今の大乘正宗分第三と名づけられてゐるものを擧げてゐる。

## 第二節

佛告須菩提。諸菩薩摩訶薩。應如是降伏其心。所有一切衆生之類。若卵生。若胎生。若濕生。若化生。若有色。若無色。若有想。若非有想。若非無想。我皆令入無餘涅槃。而滅度之。如

是滅度無量無數無邊衆生。

此れ即ち所謂應如是住である。

實無衆生得滅度者。

此れ即ち所謂應如是住である。

何以故。須菩提。

若菩薩有我相人相衆生相壽者相。即非菩薩。

と言ふに對し舊解では、此節は佛が須菩提に先づ「應如是降伏」といふことを告げ給ふたのであつて、「應如是住」に就いては別に説き給ふものと見るやうである。けれ共それは降心と住とを分別して考へる謬見から來るもので、前にも言つた如く、本經の下篇に

爾時須菩提白佛言。世尊。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。云何應住。云何降伏其心。佛告須菩提。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心者。當生如是心。我應滅度一切衆生。滅度一切衆生已。而無有二衆生實滅度者。云々(究竟無我分第十七)

とあるのが正に此文を復び擧げたもので、住と降伏とは並に分別して言つたものではない。本經の第二分に唯「應如是降伏其心」のみを述べて「應如是住」といふことがないのは、經文の不備といはねばならぬ。こゝに用ゐた羅什譯以外の諸本即ち魏の留支本、陳の眞諦本、唐の元奘本、義淨本などには、降伏の間に、

應云何住。云何修行。云何降伏其心。

と問ひ、

應如是住、如是修行、如是降伏其心。

と答へた様に、修行といふことが介在するのが常になつて居り、こゝに住と修行と降伏との三義を以て解く説も生するのであるが、凡て是等の諸本には前節の願樂欲聞の下に於て佛が再び上文を復舉した箇所がない。羅什本にのみ、「應如是降伏其心」の一語が見られる。これでは佛が降伏其心のみに偏著する所あつてかく言ふ如く見られるが、こゝでは降伏も住も分別なきを以て如是住を省略したのであるとも言へる。然し實はこの「應如是降伏其心」の七字は衍文である。元來本經の主旨は住即降伏といふ點にあるので、これは本より二なきものである。何を以て二つに之を分別して之を言はうか。而も即住即降伏の法は無我到外ならない。故に「無我の法に通達する者は眞に是れ菩薩也」と曰つてゐるではないか。有我なれば有人であり、有我有人であれば好醜がある。故に

我と人と衆生と壽者とを以て之を該したので、衆生相、壽者相は猶醜相好相と言ふが如きものである。衆生を滅度するといふ事は義として重んずる所ではない。借るに言を以てした迄である。恰も論語に、子路が孔子に向つて「願はくば子の志を聞かん」と言ふに對して

子曰。老者安之。朋友信之。少者懷之。(公冶長)

と言つた如きもので、是は孔子が借つて以て言となしたに過ぎないのである。蓋し心は本、空虚である。其が事に因つて見はれるのである。故にこゝに滅度を言ふも下に布施を言ふも其義は一である。若卵生若胎生以下は唯廣く衆生見の無量無數無邊なることを陳べたので、初より深義がある譯

ではない。而るに解する者は乃ち胎卵溼化は皆心に喩へるといふ風に考へてゐるが、それは全く曲説であつて深きを求めんとして反つて淺きに失した感がある。

### 第三節

復次須菩提。菩薩於法應無所住行於布施。所謂不住色布施。不住聲香味觸法布施。須菩提。菩薩應如是布施不住於相。

何以故。若菩薩不住相布施。其福德不可思量。須菩提。於意云何。東方虛空。可思量不也。世尊。須菩提。南方虛空。可思量不也。世尊。須菩提。西方虛空。可思量不也。世尊。須菩提。北方虛空。可思量不也。世尊。須菩提。四維上下虛空。可思量不也。世尊。須菩提。菩薩無住相布施。福德亦復如是。不可思量。

須菩提。菩薩但應如所教住。(妙行無住分第四)

俞曲園は此文を第三節とし、須菩提が應に云何か住すべきやと問ふに對し、佛は應に住する所無かるべきものを以て告げ給ふたのであるとしてゐる。即ち若し心に住あらば則ち住に非ず。不住を以て住となすのである。即住即降伏の謂に外ならぬ。上文に滅度の言を以て既に菩薩の我相人相衆生相壽者相の無なる事を明にし、此に又布施の言を以て相に住せざる事を曰つたが、相に住せざることは是れ無相を以てすることである。こゝに佛は須菩提に告ぐるに、即住即降伏の妙旨を以てした。故に「菩薩は但、應に教ふる所の如く住すべし」と曰つたのである。苟くも教ふる所の如く住しないな

らば凡夫の貪著になつてしまふであらう。

舊解では、上節で佛が須菩提に向つて「應如是降伏」を告げ、此節では「應如是住」を告げたものとする。佛は果してかくの如く分別して之を言つたであらうか。問の順序から考へても何故に降伏を先にし住を後にすることがあらう。

#### 第四節

須菩提。於意云何。可以身相見如來。不也。世尊。不可以身相得見如來。何以故。如來所說身相。即非身相。(色即空也)佛告。須菩提。凡所有相。皆是虛妄。若見諸相非相。即見如來。(如理實見分第五)

須菩提白佛言。世尊。願有衆生得聞如是言說章句。生實信。不。佛告。須菩提。莫作是說。如來滅後。後百歲。有持戒修福者。於此章句。能生信心。以此爲實。當知是人。不於一佛二佛三四五佛。而種善根。已於無量千萬佛所。種諸善根。聞是章句。乃至一念。生淨信心者。須菩提。如來悉知悉見。是諸衆生得如是無量福德。

何以故。是諸衆生此の四字は衍文。無復我相人相衆生相壽者相。亦無非法相。即ち上に云ふ所の諸相は非相である。何以故。是諸衆生四字は衍文。若心取相。則爲著我人衆生壽者。凡てあらゆる相は皆心から生ずる。若取法相。即著我人衆生壽者。有に執する。何以故。三字は衍文。若取非法相。即著我人衆生壽者。無に執するも亦有である。是故不應取法。不應取非法。以是義故。如來常說。汝等比丘。知我說法。如筏喻者。法尚應捨。何況非法。(正信希有分第六)

右の文を以て俞曲園は第四節とし、相に住せぬといふ事から之を極言して法相非法相に至るまで皆有とすべからざる者だとの意味を明にしたとするのである。こゝに「法すら尙應に捨つべし」と言つてあるが、この法とは俞曲園に従ふと、「應如是住」であり、捨とは「應如是降伏」のことである。

### 第五節

須菩提。於意云何。如來得阿耨多羅三藐三菩提耶。如來有所說法耶。須菩提言。如我解佛所說義。無有定法名阿耨多羅三藐三菩提。亦無有定法如來可說。住すれば即ち定である。即住即降伏であるから無定である。何以故。如來所說法。皆不可取。定法が有るこゝになきを以て不可說。所得がな非法。無實で非非法。無慮で所以者何。一切賢聖。皆以無爲法而有差別。一切の賢聖と云ふのは下文の須陀洹以上をくめて言ふのであつて、初果須陀洹からして成佛に至るまで同一に無爲法を以てして區別が有るのである。下文に具に之を陳べてゐる。(無得無說分第七)

須菩提。於意云何。若人滿三千大千世界。七寶以用布施。是人所得福德。寧爲多不。須菩提言。甚多。世尊。何以故。是福德。即非福德性。是故如來說福德多。若復有人於此經中。受持乃至四句偈等。爲他人說。其福勝彼。何以故。須菩提。一切諸佛及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法。皆從此經出。

須菩提。所謂佛法者。即非佛法。須陀洹から佛に至るまで皆是れ佛法であると共に皆是れ非佛法(依法出生分第八)である。佛はこゝに須菩提を啓發して下文を起すのである。

須菩提。於意云何。須陀洹。能作是念我得須陀洹果不。須菩提言。不也。世尊。何以故。須陀

洹名爲入流。須陀洹は應如而無所入。不入色聲香味觸法。須陀洹は應如是名須陀洹。所謂須陀洹の法は即ち須陀洹は應如

洹の法に非るものである。下文の斯陀含にしても阿那含にしても、均しく皆此によつて説くのである。

須菩提。於意云何。斯陀含。能作是念我得斯陀含果不。須菩提言。不也。世尊。何以故。斯陀含。名一往來。而實無往來。是名斯陀含。須菩提。於意云何。阿那含。能作是念我得阿那含果不。須菩提言。不也。世尊。何以故。阿那含名不來。而實無不來。是名阿那含。須菩提。於意云何。阿羅漢。能作是念我得阿羅漢道不。須菩提言。不也。世尊。何以故。實無有法名阿羅漢。

上文と相互に備るので、實に法の阿羅漢と名づく者が有るのではない。同様に法として須陀洹、斯陀含、阿那含など名づくるものが實際ある譯ではない。

世尊。若阿羅漢作是念我得阿羅漢道。卽爲著我人衆生壽者。阿那含以下も無論同様である。世尊。佛說我得無諍三昧。人中最爲第一。是第一離欲阿羅漢。世尊。我不作是念。我是離欲阿羅漢。世尊。我若作是念我得阿羅漢道。世尊則不說須菩提是樂阿蘭那行者。以須菩提實無所行。而名須菩提是樂阿蘭那行。此は須菩提自ら無爲法を以てするの義を明にした所である。(一相無相分第九)

佛告須菩提。於意云何。如來在然燈佛所有所得不。不也。世尊。如來在然燈佛所。於法實無所得。此は又佛自ら意を以て須菩提を啓發し、無爲の法を以てすべき事を明にしたのである。蓋し、須陀洹から佛に至る間に差別はあるが、同じく一の無爲法を以てするのである。

須菩提。於意云何。菩薩莊嚴佛土不。不也。世尊。何以故。莊嚴佛土者。卽非莊嚴。是名莊

嚴。苟くも莊嚴せる事が莊嚴である事を知れば、それが即ち莊嚴である。これからして下文の清淨の意を起すのである。

是故須菩提。諸菩薩摩訶薩。應如是生清淨心。清淨なるものは之を無とするの意である。不應住色生心。不應住聲

香味觸法生心。應無所住而生其心。無は則ち有（莊嚴佛土分第十）である。

これ俞曲園の所謂第五節であつて、上文の「法尙應捨」を承け、更に進んで獨り捨つべきであるのみならず、無法である譯で、須陀洹よりして成佛に至るまで

皆是佛法であり、皆非佛法であつて同一無爲法であることを見はしたものである。無の極は清淨である。清淨の極は湛然無物にして天下の理は皆此よりして出づるのである。是を「無所住而生其心」と謂ふのである。苟くも住する所あらば即ち其心を生ずる事は不能である。故に即住即降伏の要は「無所住而生其心」に在る。然る後以て佛と成るべく、然る後以て一切の衆生を滅度することが出来るのである。佛が須菩提に告ぐるの主旨は略々此に盡くされてゐるのである。

## 第六節

須菩提。譬如有人身如彌山王。於意云何。是身爲大不。須菩提言。甚大。世尊。何以故。佛說非身是名大身。（莊嚴淨土分第十）

須菩提。如恒河中所<sub>レ</sub>有沙數。如是沙等恒河。於意云何。是諸恒河沙。寧爲多不。須菩提言。甚多。世尊。但諸恒河尚多無數。何況其沙。須菩提。我今實言告汝。若有善男子善女人。以七寶滿爾所恒河沙數、三千大千世界。以用布施。得

福多不。須菩提言。甚多。世尊。佛告。須菩提。若善男子善女人。於此經中。乃至受持四句偈等。爲他人說。而此福德勝前福德。——(無爲福勝分第十一)——

復次須菩提。隨說。是經乃至四句偈等。當知此處。一切世間天人阿修羅。皆應供養如佛塔廟。何況有人。盡能受持讀誦。

須菩提。當知是人。成就最上第一希有之法。若是經典所在之處。則爲有佛若尊重弟子。——(尊重正教分第十二)——

爾時須菩提白佛言。世尊。當何名此經。我等云何奉持。佛告。須菩提。是經名爲金剛般若波羅蜜。以是名字。汝當奉持。

所以者何。佛說般若波羅蜜卽非般若波羅蜜。

非法が是れ法である、同じく非身が是れ身であるといはねばならぬ。此より以下は佛法の非法なることを明にするのである。

須菩提。於意云何。如來有所說法不。須菩提白佛言。世尊。如來無所說。

法を離れるを以て法とする、故に法に拘泥し

て以て説をなす  
ことは出來ぬ。

須菩提。於意云何。三千大千世界所有微塵。是爲多不。須菩提言。甚多。世尊。須菩提。諸微

塵。如來說非微塵。是名微塵。如來說世界非世界、是名世界。微塵は極めて小なるものである、世界は至大のものである、然し小に執して

小とせば小となすに足らない、大に執して大とするならば大とするに足らぬ。然らば微塵は小ではない、世界は乃ち小である。是の故に微塵に非ざるものを微塵と名づける。世界は大ではない、微塵が乃ち大であるとも云へる。是の故に世界に非るものを世界と名づける

のである。

須菩提。於意云何。可以三十二相見如來不。不也。世尊。不可以三十二相得見如來。何以

故。如來說三十二相卽是非相。色は卽是空  
である。是名三十二相。空卽是色の  
意である。

須菩提。若有善男子善女人。以恒河沙等身命布施。若復有人。於此經中。乃至受持四句偈等。爲他人說。其福甚多。

(如法受持分第十三)

爾時須菩提。聞佛說是經。深解義趣。涕淚悲泣。而白佛言。希有。世尊。佛說如是甚深經典。我從昔來。所得慧眼。未曾得聞如是之經。世尊。若復有人。得聞是經。

信心清淨。則生實相。信心清淨は空である。則ち實相を生ずるには、空即是色の意である。

當知是人成就第一希有功德。

世尊、是實相者。即是非相。是故如來說名實相。虛靈不昧の本體は幻相ではないのである。

世尊、我今得聞如是經典。信解受持。不足爲難。若當來世。後五百歲。其有衆生。得聞是經。信解受持。是人則爲第一希有。

何以故。此人無我相、無人相、無衆生相、無壽者相。所以者何。我相即是非相。人相衆生相壽者相。即是非相。何以故。離一切諸相。則名諸佛。

世界といひ微塵といひ佛の三十二相と云ふも皆未だ相を離れたものではない。而して皆實相ではないのである。故に大身の一喻から以後は皆此の意を發明するの言であつて、一切の相を離れるといふことを以て歸宿とするのである。

佛告須菩提。如是。如是。

若復有人。得聞是經。不驚不怖不畏。當知是人甚爲希有。

何以故。須菩提、如來說、第一波羅蜜即非第一波羅蜜。是名第一波羅蜜。非法をいふ。非非法をいふ。須菩提。忍辱波羅蜜。如來說、非忍辱波羅蜜。第一波羅蜜は説くべきでないことよりして、忍辱波羅蜜を以て之を言ふのであつて、淺を以て深を見したものである。

何以故。須菩提。如我昔爲歌利王割截身體。我於爾時。無我相。無人相。無衆生相。無壽者相。何以故。我於往昔節節支解時。若有我相。人相。衆生相。壽者相。應生瞋恨。須菩提。又念過去於五百世。作忍辱仙人。於爾所世。無我相。無人相。無衆生相。無壽者相。忍辱波羅蜜に於て此の二事を證し離相の功を明にするのである。

是故須菩提。菩薩應離一切相。發阿耨多羅三藐三菩提心。不應住色生心。不應住聲香味觸法生心。應生無所住心。前に應に住する所なくして其心を生ずると言つたのは住によつて生ずることであり、こゝに應に住する所なきの心を生ずるといふのは住即是生である。

以上第六節は、前に相に住せざることによつて之を極言して無爲の法に至るべきことを説き所謂佛法は凡て非佛法なる事を明にしたから、此には佛の法は法に非ずといふことを極言して一切の相を離るゝに至らしめ、之を相に住せざる處に歸し廻環して相の生ずることを開示したのである。即ち凡て法相は皆空であることを見得ることが降伏の極切であることを見たのである。

### 第七節

若心有住。則爲非住。佛は不住を以て住とする、故に即住即降伏である。此より以下は前文を約舉して上篇を總結するのである。是故佛說。菩薩心不應住色布

施。須菩提。菩薩爲利益一切衆生。應如是布施。色は色に非ず。又說、

一切衆生。即非衆生。形は形に非ず。須菩提。如來是真語者。實語者。不誑語者。不異語者。如語は即眞語。實

語であり亦即ち不誑語不異語である。其の眞の如く其の實の如きが故に不誑不異である。佛は之を須菩提に告げて、其の言の信すべくして、眞語實語は不誑不異にして如語に非ざるなきを明にしたものである。其の義のまゝに説くことは有語亦無語といふ

ここに  
なる。

須菩提。如來所得法。此法無實無虛。

こゝに無實といふのは非法といふことであり、無虚といふのは非非法に當る。前に「如來於法無所得」とあるのは無實を明にしたのであるが、此に「如來所得法」といふのは無虚の義を明にしたのである。無實は降伏の功であつて、無虚は住の效に外ならない。惟々如來は法に於て得る所無きが故に如來の所得の法なるのである。蓋し不住といふことは以て降伏を言ふに足らないが而も不降伏も亦以て住と言ふに足らぬ。故に佛は般若波羅蜜。即非般若波羅蜜と説くのである。即住即降伏は是れ非法、非非法であり、即ち無實無虚である。金剛經の主旨は此に盡きてゐると謂つてよい。

須菩提、若菩薩心住於法。而行布施。如人入闇。則無所見。若菩薩心不住法。而行布施。下如人有目。日光明照。見種種色。

須菩提、當來之世。若有善男子善女人。能於此經。受持讀誦。則爲如來。以佛知慧。悉知是人。悉見是人。皆得成就無量無邊功德。(離相寂滅分第十四)

須菩提、若有善男子善女人。初日分以恒河沙等身布施。中日分、復以恒河沙等身布施。後日分、亦以恒河沙等身布施。如是無量百千萬億劫。以身布施。若復有人。聞此經典。信心不逆。其福勝彼。何況書寫受持讀誦。爲人解說。須菩提。以要言之。是經有不可思議、不可稱量、無邊功德。如來爲發大乘者說。爲發最上乘者說。若有其人。能受持讀誦。廣爲人說。如來悉知是人。悉見是人。皆得成就不可量、不可稱、無有邊、不可思議功德。如是人等。則爲荷擔如來阿耨多羅三藐三菩提。何以故。須菩提、若樂小法者。著我見人見衆生見壽者見。則於此經。不能聽受讀誦爲人解說。須菩提、在在處處。若有此經。一切世間天人阿修羅所應供養。當知此處。則爲是塔。皆應恭敬、作禮、圍繞、以諸華香而散其處。(持經功德分第十五)

復次須菩提、善男子善女人。受持讀誦此經。若爲人輕賤。是人先世罪業應墮惡道。以今世人輕賤之故。先世罪業。則爲消滅。當得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。我念過去無量阿僧祇劫。於然燈佛前。得值八百四千萬億那由他諸佛。悉皆供養承事。無空過者。若復有人。於後末世。能受持讀誦此經。所得功德。於我所供養諸佛功德。百分不及一。千萬億分。乃至算數譬喻所不能及。須菩提。善男子善女人。於後末世。有受持讀誦此經。所得功德。我若具說者。或有人聞、心則狂亂、狐疑不信。須菩提。當知是經義不可思議。果報亦不可思議。(能淨業障分第十六)

以上第七節は上來の所説を反覆申明したに過ぎない。これ迄を上篇とし、後人の添加がかなり多い様に見てゐる。

## 五

## 下篇第一節

爾時須菩提白佛言。世尊。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。云何應住。云何降伏其心。佛告須菩提。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心者。當生如是心。我應滅度一切衆生。滅度一切衆生已。而無有一衆生實滅度者。何以故。須菩提。若菩薩有我相人相衆生相壽者相。則非菩薩。これは上文を再び舉げて以下篇を起すのである。

所以者何。須菩提。實無有法發阿耨多羅三藐三菩提心者。無は能く有を生ずる、有は能く無を生ぜない。須菩提。於意云何。如來於然燈佛所。有法得阿耨多羅三藐三菩提不。不也。世尊。如我解所

說義。佛於然燈佛所。無有法得阿耨多羅三藐三菩提。佛言。如是如是。須菩提。實無有法如來得阿耨多羅三藐三菩提。

塵が除かるれば鏡は明になる。然し明は鏡其者の本體である。塵の盡きたるに由つて明を助けるものではない。水は釋けて水となり流れる。然し流るる事は固より水の本性である。水の釋くる事によつて其流を益す譯ではあるまい。

須菩提。若有法如來得阿耨多羅三藐三菩提者。然燈佛則不與我授記。汝於來世。當得作佛號釋迦牟尼。

須菩提は「實無所行」を以てして世尊は之に名けて阿闍那行を樂ふをなした、如來は「實無所得」を以てして然燈佛は記を授けて來世に於ては佛となつて釋迦牟尼と號すべしと言つたとすれば、如來と須菩提とは差等がつく様であるけれ共、其の無爲法を以てする時は則ち一である。

何以故。如來者即諸法如義。

この諸法如義といふのは、一切の法は各々其義のまゝに歸するを云ふ意味である。如來は恰度明鏡の如きものである、前に人の來るに當つては人たる事を知り、物の來るあらば見て物とする、其の來るが如きも其まゝであるから所謂如來である。少しも塵埃があらば如來さばなれない。故に一切の妄念が有つてはならない。塵埃は固よりあるべからざるものであつて、珠塵にしる、玉屑にしる之ありとすれば如來たる事は出來ぬ。故に一切の法も亦有るべからざるものである。

若有入言。如來得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。實無有法佛得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。如來所得阿耨多羅三藐三菩提。於是中無實無虛。是故如來說一切法皆是佛法。須菩提。所言一切法者。即非一切法。是故名一切法。須菩提。譬如人身長大。須菩提言。世尊。如來說、

人身長大。則爲非大身。是名大身。(究竟無我分第十七ノ中)

上篇では大身の一喻から下文を起して來たのであるが、此篇では大身の一喻で以て上文を結んでゐる。總て大身の非大身なることを以て佛法の非佛法なることを明にするのである。

以上の文は本經の下篇に於ける第一節であつて、説く所は非法非非法の義を以てするのであつて、已に先に説く所を再叙したに過ぎないのである。

## 第二節

須菩提。菩薩亦如是。若作是言。我當滅度無量衆生。則不名菩薩。何以故。須菩提。無有法名爲菩薩。是故佛説一切法無我無人無衆生無壽者。須菩提。若菩薩作是言。我當莊嚴佛土。是不名菩薩。何以故。如來說、莊嚴佛土者。即非莊嚴。是名莊嚴。

我當に衆生を滅度すべしとか、我當に佛土を莊嚴すべしと言はば、我といふものがある。故に下に無我に通達するものが、眞の菩薩であること云ふのである。

須菩提。若菩薩通達無我法者。如來說名眞是菩薩。(究竟無我分第十七)

以上は舊來究竟無我の第十七分と名づけられるもの、末節であるが、俞曲園では下篇第二節と考へてゐる。こゝでは上文を承けて、一切の法は即ち非一切法である、然る所以は、一切の法といふも皆我より生ずる。我あれば人あり、有我有人ならば衆生も壽者もある。かくの如き一切のものが有るならば即ちかくの如き一切の法が有ることになる。故に必ず之に先つに無我を以てせねばならぬ。

無我の法に誠に能く通達するならば一切の法と言はずも可であり、一切の法を言ふも可である。

金剛經の大旨は已に言へる如く即住即降伏にありとすれば、降伏其心といふことは無我より始まるのである。故に此に特に此の意味を明確にして置いて下文に「知一切無我」が此經の要義であることを云ふのである。

### 第三節

須菩提。於意云何。如來有肉眼不。如是。世尊。如來有肉眼。須菩提。於意云何。如來有天眼不。如是。世尊。如來有天眼。須菩提。於意云何。如來有慧眼不。如是。世尊。如來有慧眼。須菩提。於意云何。如來有法眼不。如是。世尊。如來有法眼。須菩提。於意云何。如來有佛眼不。如是。世尊。如來有佛眼。(一體同觀分第十八ノ中)

此の第三節は下節と與に上文の無我を承けて、有に即いて以て無を明にせんとしたものである。肉眼も有、天眼も有、慧眼も有、法眼も有、佛眼も亦有りとすれば、如來は無眼である。何となればたゞ肉眼のある場合は之を名けて肉眼と云ふ事が出来、たゞ佛眼あるのみの時は之を名けて佛眼とのみ曰ひ得るのであるから、肉眼より佛眼に至るまで有らざるものなき場合は、則ち名くべきやうはないのではなからうか。凡て經中に一切の諸相は即ち是れ非相であると言つてゐるのも此の意味より以外に出ないのである。

第四節

須菩提。於意云何。如恒河中所有沙。佛說是沙不。如是。世尊。如來說是沙。須菩提。於意云何。如一恒河中所有沙。有如是沙等恒河。是諸恒河所有沙數。佛世界如是。寧爲多不。甚多。世尊。佛告須菩提。爾所國土中。所有衆生若干種心。如來悉知。何以故。如來說。諸心皆爲非心。是名爲心。一切の妄念を論ずることなくば、上文の我當に衆生を滅度すべし、こゝに我當に佛土を莊嚴すべしなど云ふは皆非心である。心は固より湛然無物である。

所以者何。須菩提。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。(一體同觀分第十八)  
これも亦有に即して無を明にするのである。過去現在未來の三種心が人々にはある。然し此心を求め究めたならば何處に在るであらうか、亦無である。

右第四節は如來の五種眼や衆生の三種心を擧げ來つて以て無我の旨を明にしたものであつて、其以外に深い意味のある所ではない。

第五節

須菩提。於意云何。若有入滿三千大千世界七寶以用布施。是人以是因緣。得福甚多。世尊。此人以是因緣。得福甚多。須菩提。若福德有實。

こゝの有實は當に實有とあるべきである。下文には若浮塵衆實有者、若世界實有者、さいふ如く實有と作つて有實とは作られ  
 ない。こゝも之と同じかるべき處である。

如來不說得福徳多。有なれば則ち無であるから以福徳無故。如來說得福徳多。無なる時は則ち有である。

第五節も亦上文の無我法に通達することを承けて、法すら尙應に捨つべきものである以上、何を以て福德を論ずるに足らうと言ふ旨である。蓋し無法を以て法とすれば、無福德を以て福德とすることが出来る。然るに世の愚僧は妄に増益をなして専ら福德といふ事で以て衆生を誘勸しようとするものがある。佛の旨を失つたものである。

## 第六節

須菩提。於意云何。佛可以具足色身見不也。世尊。如來不應以具足色身見。何以故。如來說具足色身。卽非具足色身。是名具足色身。

如來の説く所の色身は、此の色身ではない。そこが乃ち眞に色身を具足するのである。下文も之に準じて知るべきである。

須菩提。於意云何。如來可以具足諸相見不也。世尊。如來不應以具足諸相見。何以故。如來說諸相具足。卽非具足。是名諸相具足。(離色離相分第二十)

非身の身が乃ち眞身である。非相の相が乃ち眞相である。蓋し外的の身、相は皆幻形に過ぎない。佛と雖も亦常に有るさいふことは出来ぬ。然し此中に自ら不壞の者の存することを知れば、能く一切の相を離れることが出来て佛と成るのである。此身もなく此の相もなければ人ではない。共此身此相は皆幻である。とすれば孰れか眞なるものであらうか、其は吾自身の本性であらう。吾能く此の性を保ち千百劫と雖も不壞であり得るならばよい譯である。この點が佛の佛たる所以である。仙道では修鍊といふ事を言ふ。そして此身を常存し此相を永久に存しようと願ふのである。然し果して可能であらうか。是れ仙の佛に及ばざる所以である。

右の第六節では、佛が既に無我を以て人に示された上に復此を説くのは、蓋し無我の中又自ら有我

がある。此は無實無虚として初に在つて阿耨多羅三藐三菩提心を發する所以の者である。卽住卽降伏と云ふことも降伏を以て住とすることになる。かくて無我にして有我である、こゝが金剛經の大意である。

### 第七節

須菩提。汝勿謂如來作是念。我當有所說法。莫作是念。何以故。若人言如來有所說法。

卽爲謗佛。不能解我所說故。須菩提。說法者。無法可說。上篇に「無有定法如來可說」といひ此に「無法可說」といつて其義を更に進めてゐる。蓋し

「無定法」といふことは「有法」のことである。無法「無定法」といふことは「有法」のことである。無法是名說法。一言にして之を蔽へば、無

爾時慧命須菩提白佛言。世尊。頗有衆生。於未來世。聞說是法。生信心不。佛言。須菩提。彼非衆生。非不衆生。何以故。須菩提。衆生衆生者。如來說非衆生。是名衆生。

此の六十二字は古本には無い文で後人が増益したのである。蓋し佛の「法の説くべき無し」と言ふを以て人々が佛法を信ぜざるあらんかを恐れて此文を増益したのであらう、其意は衆生は則ち不信、非衆生は則ち自ら能く信ずと云つて、人の信を堅くする所以である。かの福德を陳べると同じ趣意で皆佛弟子護法の苦心とも謂ふべきものである。

思ふに此文の竄入なることは齋曲園を俟つまでもなく已に元賢の金剛經略疏中に注意したやうに、魏の菩提留支の譯から補はれたもので、元來羅什本にあつたものではない。尙此段のことは吾松本博士も引證せられてゐる。(注一)

須菩提白佛言。世尊。佛得阿耨多羅三藐三菩提。爲無所得耶。佛言。如是如是。須菩提。我於阿耨多羅三藐三菩提。乃至無有少法可得。失ふ所なければ、是名阿耨多羅三藐三菩提。(無法可得分)

得る所もない。

(第二十二)

復次須菩提。是法平等。無有高下。

前に差等ありと言つたのは成就の次第であるが、此に高下なしと言ふのは眞體の本来を示したのである。

是名阿耨多羅三藐三菩提。以無我無人無衆生無壽者修一切善法。則得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。所言善法者。如來說卽非善法。是名善法。(淨心行善分第二十三)

阿耨多羅三藐三菩提に於て少法の得べきもの有ることなしと云ふ所は、佛の佛たる所以である。一切の善法を修したならば阿耨多羅三藐三菩提を得ると考へる所が此れ衆生の衆生たる所以である。佛は自ら少しも法として得べきものは無いと言つてゐる。然らば何を以て衆生を處せんとするか、こゝでは此の問題を説くのである。凡そ一切の法は恰度醫者が藥を用ふる様のものである。佛には全く病がない。何の藥も雖も用ふるには及ばぬ、餘の衆生各々其病について藥を用ふるの要がある。是に於て一切の善法が有る譯である。然しこの一切の善法は之を常に一定のものとするべきではないのである。感冒に罹つた者には發汗劑を用ふるのが善法であるが、熱病の者に同一のものを施すと云ふならば善法ではあるまい。故に善法といふ者は卽ち善法に非ず之を善法と名づけるのである。法は無かるべからざるものではあるが、法に執してはならぬ。故に上智の爲に説く時は法の説くべきものはなく、下愚の爲に説く時は定法の説くべき無しと云ふ事になる。

須菩提。若三千大千世界中所有諸須彌山王。如是等七寶聚、有人持用布施、若人以此般若波羅密經。乃至四句偈等。受持讀誦。爲他人說。於前福德。百分不及一。百千萬億分。乃至算數譬喻。所不能及。(福智無比分第二十四)

須菩提。於意云何。汝等勿謂如來作是念。我當度衆生。須菩提。莫作是念。何以故。實無有衆生如來度者。若有衆生如來度者。如來則有我人衆生壽者。須菩提。如來說有我者。則非有我。而凡夫之人。以爲有我。須菩提。凡夫者。如來說則非凡夫。

其初を原ねれば聖人も亦凡人である。凡人も亦聖人である。聖と凡

さ一定でない、然るに何で(化無所化分第二十五)我さいふものがあらうか。

須菩提。於意云何。可以三十二相觀如來不。須菩提言。如是如是。以三十二相觀如來。佛言。須菩提。若以三十二相觀如來者。轉輪聖王。則是如來。須菩提白佛言。世尊。如我解佛所說義。不應以三十二相觀如來。(法身非相分第二十六)

これは上篇に述ぶる所の語と同じものであるが、但、上篇の文は略されて、中間往復の語がない。世人は上篇の須菩提が已に三十二相を以て如來を見るべからざるを知つてゐながら、何故に先に悟つて後に迷ふかについて疑を起し、之が爲に説を爲して、前に言ふ、相を以て見る可らざる者は色即是空といふことである。此に相を以て觀るべしと云ふは空即是色である。と言ふのである。若し説者の如く考へるならば、正に無實無虛の義と合する。一旦印可せられて、反つて駁詰せられると云ふのは何故であらうか。

爾時世尊。而說偈言。若以色見我。以音聲求我。是人行邪道。不能見如來。(法身非相分第二十六)

右を第七節とする。こゝには、法の説くべきなく、法の得べき無く、衆生の度すべき無きを以て、上文に已に言明した所の義を擧げて之を申明した迄である。仍て無相を以て歸宿とするの義であるが其は皆上篇に具つてゐるのであるから、上篇さへ注意すれば自然明かな筈である。

所で此節を魏の留支譯本と對照して見ると、留支本では、須菩提。於意云何。可以相成就得見如來不。須菩提言。如我解如來所說義。不以相成就得見如來。佛言。如是如是。須菩提。不以相成就得見如來。佛言。須菩提。若以相成就觀

如來者。轉輪聖王。應是如來。是故非以相成就得見如來。爾時世尊而說偈言。云々  
となつて居り、唐の義淨の本では

妙生。於意云何。應以具相觀如來不。不爾。世尊。不應以具相觀於如來。妙生。若以具相觀如來者。轉輪聖王。應是如來。是故不應以具相觀於如來。應以諸相非相觀於如來。  
爾時世尊而說頌曰。……

と譯出されてゐる。按ずるに此文は菩提留支以下の各譯本は秦本即羅什のものとは同じくない。蓋しこれは秦本の方が誤つて居るのであらうと思ふ。

然り、吾人も此の俞曲園の疑著を當然と信ずると共に其の達見に推服せざるを得ない。何となれば、本經の第十三分(俞曲園の上篇第六節)に於て

須菩提。於意云何。可以三十二相見如來不。不也。世尊。不可以三十二相得見如來。  
とあるに反し、この節では

須菩提。於意云何。可以三十二相觀如來不。須菩提言。如是如是。以三十二相觀如來。  
とあつて、先には三十二相によつて如來を見るを不可とし乍ら、こゝでは三十二相を以て如來を觀ると肯定してゐる。明に矛盾である。今梵本の該所を披見するに

Tat kin manyase Subhite, laksanasanipadā Tathāgato draṣṭavyah. Subhūtrāho, No hidain Bhag-

avan. Yathāhain Bhagavato bhāṣitasyārthamāñāmi na lakṣaṇasaṃpadā Tathāgato draśīavyah.

須菩提よ、如何に汝は思ふか、相具足を以て如來を見るべきや。須菩提曰く、是は實に非なり。世尊よ、我が世尊所説の義を知る如くんば、相具足を以て、如來を見るべからず。

とあり、第十三分にはこの lakṣaṇasaṃpadā (相具足もつ)が dvātrīṃsanmahapurusa-lakṣaṇais. (三十二大人相を以て)となつてゐるが、何れにしても意味に於て變つた點は無いので、(註二)共に相によつて如來を見てはならぬ義を述べたものである。とすればこの羅什譯に觀如來とするは誤で不可觀如來でなくてはならぬ筈である。俞曲園は別に梵本を對照した譯ではないが此の場合全く同一の正しい結論に達してゐるのである。處がこゝに面白いのは、俞曲園も金剛經注を書く前に出した金剛經訂義の中では羅什譯を何處迄も合理的に解釋しようと力めたらしく、觀如來と見如來とは意味に相違がある。「見者彼與我見也。觀者以我觀彼也。」といふ説を押し立て、

如來爲希有。世尊宜示我最上第一希有之法。豈徒以三十二相示我哉。故不可以相見也。若以我觀如來、則所謂無所從來亦無所去者。我何從知之。得相而觀之、是亦足矣。故欲以三十二相觀如來也。

と説き、論語の「子貢曰。夫子之文章可得而聞也。夫子之言性與天道不可得而聞也。」(公冶長第五)といふのは孔子の徒が亦夫子の道は徒に文章を以て見るのみでないことを知つてゐる事で、恰

度須菩提の「不可以三十二相見如來」である。而るに論語でも郷黨篇には孔子の飲食から居處衣服の制までを記して後世に示してゐる。此點は須菩提が「以三十二相觀如來」と云ふのと同じの行き方だとも述べ、

佛言、以三十二相觀如來。轉輪聖王則是如來。又說偈言若以色見我。以音聲求我。是人行邪道。不能見如來。蓋如來所與人見者。不在此。則人之觀如來者。亦當不在此。而在須菩提之意。則固非前後兩歧也。(註三)

と強辨してゐるのであるが、金剛經注に於ては此説を全部放棄してゐる。蓋し當然爾かあるべきことだと思ふ。

## 第八節

須菩提。汝若作是念。如來不<sup>△</sup>以具足相故得阿耨多羅三藐三菩提。莫作是念。如來は具足したる阿耨多羅三藐三菩提を得るのだと謂ふのは、是れ猶ほ三十二相を以て如來を觀すと言ふ如きである。故に之を戒めて是の念を作す莫れと曰つてゐるのである。文義に於て甚だ明瞭である。所が如來の下に不の字があるが、之は衍字であらうと思ふ、不の字を生かす爲に異説も多く出るのであるが、今は取らない。又此次に何以故の三字があるべきであらう、そして下文と相準するのが至當であるが、文の不備である。

何以故如來不以具足相故得阿耨多羅三藐三菩提。此は佛に就いて言ふのである。

須菩提。汝若作是念。發阿耨多羅三藐三菩提心者。說諸法斷滅。莫作是念。阿耨多羅三藐三菩提に於て少法の得べき者の無いといふことは、佛の佛たる所以である。一切の善法を修して阿耨多羅三藐三菩提を得るのは、衆生の衆生たる所以である。若し衆生が初に阿耨多羅三藐三菩提心を發し而して即ち諸法の斷滅を説くならば、竟に何物も得べきものはないであらう。

故に又「莫<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>是念<sup>一</sup>」  
と戒めたのである。

何以故。發阿耨多羅三藐三菩提心者。於法不說斷滅相。これは衆生について言つたのである。(無斷無滅分第二十七)

以上第八節は上の第七節を承け、こゝでは佛と衆生とを分別して、法相に執着せず亦法相を廢せざるの理を示す所であつて、衆生を誘掖するの義として至れる所のものである。

因に云ふ、俞曲園が先に著した金剛經訂義に於て述べる所を見ると、此の第八節の文に就て大なる疑點を挿み新見を樹て、居た様である。曰く、本經は第三分に

有我相人相衆生相者。非菩薩。

と云ふより以下無相の義を説くのであるが、更に上の第二十六分(所謂第七節)で

若以色見我。以音聲求我。是人行邪道。不能見如來

と大聲疾呼するのみならず、此の節では

如來は具足相を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得

といひ、又

阿耨多羅三藐三菩提心を發する者は、法に於て相を斷滅するを説かず。

と言ふのを見ると、已に第十四分(所謂上篇第六節)に所謂

菩薩は應に一切の相を離れて、阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。

と言つてゐる事と矛盾する。説者の或者は、佛が、人の無にのみ執して有を棄てると後人をして入道の門無からしむる恐れがあるから、相は執す可らざると共に亦毀つ可らざるものである意を示し、或時は相の不可有を説き、或時は相の不可無を明すのであると辨するけれ共、此等の數言が岐出する事は明に矛盾であつて、其間に文字の衍誤があると思なければならぬ。畢竟此節の

莫作是念。如來不以具足相故。得阿耨多羅三藐三菩提。

といふ所は不の一字が衍で後世の竄入であり、又

何以故。發阿耨多羅三藐三菩提心者。於法不說斷滅相。

と云ふ文では何以故の三字が衍竄である。故に經文に、

須菩提。汝若作是念。如來不以具足相故得阿耨多羅三藐三菩提。

とあるのは之を正言したので、

須菩提。莫作是念。如來以具足相故。得阿耨多羅三藐三菩提。

と云ふのは之を反言したのである。又

須菩提。汝若作是念。發阿耨多羅三藐三菩提者。說諸法斷滅相。

と云ふのは之を正言したので、

莫作是念。發阿耨多羅三藐三菩提心者。於法不說斷滅相。

とあるのは之を反言したのである。互に反復して無相の義を發明する處であるが、不<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>の四字の誤衍の爲に經の義と乖違する様になつたと俞曲園は考へた様である。(註四)

所がこの金剛經訂義の説は後、自ら金剛經注を書く時には改めてゐる。即ち上記の如く、不<sup>レ</sup>の字の衍なる事は依然として固守するが何<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>の衍とする説を捨て、反對に

如來不以具足相故得阿耨多羅三藐三菩提。

の文の上に何<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>の三字が脱落したのであるとし後の「何<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>。發阿耨多羅三藐三菩提心者。云々」の「何<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>」と相對する意味を主張してゐるのである。尙金剛經訂義の場合は「莫作是念」を文の初に讀む説であつたものが、金剛經注に至つては文の終りに句する様に見てゐる。

以上は曲園自身に於て研究の進展を物語る意味の面白い過程を示すものであると思ふ。今之を梵本の同所と比較するならば

Tat kiñ manyase Subhūte, laṣaṇasaṅgipadā Tañhāgatenānuttarā samyaksañ-bodhirabhisambuddhā.

Na khalu punaste Subhūte, evaṃ draṣṭavyam. Tat kasya hetoḥ. Na hi Subhūte, lakṣaṇasaṅgipada

Tañhāgatenanuttara samyat ksañbodbhirabhisambuddhā Syāt Kḥalu punate Subhūte, kaścidēkañ

vaḍeṭ, Bodhisattvayānasañgiprasthitāñ Kasyacidharmasya vināsāñ, prajñapta ucchedo veṭi. Na khalu

punaste Subhūte, evaṃ draṣṭavyam. Tat kasya hetoḥ. Na Bodhisattvayānasañgiprasthitāñ

須菩提よ、如何に汝は思ふか。相具足を以て如來は無上正等覺を證得したまひたるか。時に又須菩提よ、汝是の如く見ることを勿れ。其故は須菩提よ、相具足を以て如來は無上正等覺を證得し得ざればなり。時に又須菩提よ、誰か汝に諸の覺有情乘に發趣したる者は或る法の破滅或は斷を施設す云ふが如く言はんか。時に復須菩提よ、汝是の如く見ることを勿れ。其の故は諸の覺有情乘に發趣したる者は或法の破滅或は斷を施設せざればなり。(註五)

とあるから略々愈曲園の所解と一致する様に思はれ、轉々其の推究達識に敬服せざるを得ない。

## 第九節

須菩提。若菩薩以滿恒河沙等世界七寶、持用布施。若復有人。知一切法無我。得成於忍。

此の忍は此菩薩勝前菩薩所得功德。何以故。須菩提。以諸菩薩不受福德。須菩提。所作福德不降伏の謂。

應貪著。是故說不受福德。(不受不貪分第二十八)

此の第九節の文は、上に諸法斷滅を説く莫れと言ふに因つて、人々が有に執して以て法となすを恐れる意味から、之を無我に歸せしめんとし無私の功德を極言しようとしてゐるのである。然し功德は福德ではないのであるが、人は福德を以て功德と爲して貪著する所があり、無私の義に反するを恐れるが故に又福德を受けずと説いて之を明瞭にしたのである。是によつても、諸々の福德を言ふものは凡て佛の旨を失してゐるといふことが知られるであらう。

## 第十節

須菩提。若有<sub>レ</sub>人言<sub>レ</sub>如來若<sub>レ</sub>來若<sub>レ</sub>去若<sub>レ</sub>坐若<sub>レ</sub>臥。是人<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>我所<sub>レ</sub>說義。何以<sub>レ</sub>故。如來者。無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>從來。無<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>也。亦無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>去。無<sub>レ</sub>虛<sub>レ</sub>也。故名<sub>レ</sub>如來。(威儀寂靜分第二十九)須菩提。若善男子善女人。以<sub>レ</sub>三千大千世界碎<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>微塵。於<sub>レ</sub>意云何。是微塵衆寧<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>多不。甚多。世尊。何以<sub>レ</sub>故。若<sub>レ</sub>是微塵衆實有者。佛則不<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>是微塵衆。實則虛<sub>レ</sub>である。有<sub>レ</sub>則無<sub>レ</sub>である。所以者何。佛說<sub>レ</sub>微塵衆即非<sub>レ</sub>微塵衆。之<sub>レ</sub>を合<sub>レ</sub>すれば即<sub>レ</sub>ち世界<sub>レ</sub>なるから。是名<sub>レ</sub>微塵衆。之<sub>レ</sub>を散<sub>レ</sub>すれば即<sub>レ</sub>ち世界<sub>レ</sub>なるから。何以<sub>レ</sub>故。若<sub>レ</sub>世界實有者。則<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>一合相。世界は微塵の積である。若し實有と考へるなら、一合の實相である。如來說<sub>レ</sub>一合相。則非<sub>レ</sub>一合相。之<sub>レ</sub>を離<sub>レ</sub>して一<sub>レ</sub>なる。是名<sub>レ</sub>一合相。之<sub>レ</sub>を合<sub>レ</sub>すれば則<sub>レ</sub>ち一<sub>レ</sub>なる。須菩提。一合相者。則<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>說。之<sub>レ</sub>を離<sub>レ</sub>せば萬<sub>レ</sub>となり、之<sub>レ</sub>を合<sub>レ</sub>すれば一<sub>レ</sub>なる。此の一合相は無<sub>レ</sub>實無<sub>レ</sub>虛である。さうして説くことが出来る。但凡夫之人。貪<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>其事。不住<sub>レ</sub>を以<sub>レ</sub>て住<sub>レ</sub>とするならば即<sub>レ</sub>ち此の一合相はないことになる。(一合理相分第三十)

この章は第十節とすべきものであつて、上文に貪著すべからざることを言つたので、之を承けて、能く貪著する所がなければ、自ら無實無虚の妙を得る。如來といひ、世界といひ、微塵衆といふも皆實有ではない。されば何に執著し、何物を貪ることであらう。貪著すべき何物もあらう筈はないと言ふのである。

### 第十一節

須菩提。若人言佛說我見人見衆生見壽者見。須菩提。於意云何。是人解我所說義不。不也。世尊。是人不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>如來所<sub>レ</sub>說義。何以<sub>レ</sub>故。世尊說<sub>レ</sub>我見人見衆生見壽者見。即非<sub>レ</sub>我見人見衆生見壽者

見。是名我見人見衆生見壽者見。こゝに相さいはずして、見と語を變へてあるのは、人からして之を觀た時は相とざるが、我を以て自ら觀た時には見とざるからである。菩薩に在つては我の相も人相も衆生相も壽者相もない。かくて已に菩薩のみり得たのであるが、佛の如きは、たゞ是等の相が無いと云ふ丈ではなく、此の見も無いのである。たゞ此の見が無いと云ふのみでなく此の見が無いと云ふことも無いのである。所謂絶対的なものである。何と云へば我と云ふか人と云ふか衆生、壽者等の見が有るものとせば、固よりはれ我見人見衆生見壽者見がある。即ち自ら我人衆生の見が無いと思ふこと自身に亦我見人見衆生見壽者見と云ふものを有してゐるのである。蓋し是なる者は固よりは是であるが、非なる者も亦是である。并に此れ非なるものも之を無として、そこで之を眞無とし盡すのである。この境涯が降伏の極功である。故に下の文には、應如是知、如是見、如是信解、と曰つてゐる。蓋し降伏の極地に至つて住する所を得る譯である。

須菩提。發阿耨多羅三藐三菩提心者。於一切法應如是知。如是見。如是信解。不生法相。須菩提。所言法相者。如來說、即非法相。是名法相。(知見不生分第三十一)

かの人の所謂法相は法相であるが、如來の所謂法相は非法相である。如來はたゞ法相が生じないと云ふ許ではない、非法の法も非相の相も亦生ぜないのである。こゝが眞實に法相を生ぜぬと言ふ意味なるのである。

須菩提。若有、人以、滿、無量阿僧祇世界、七寶、持用、布施。若有、善男子善女人。發菩提心者。持於此經。乃至四句偈等。受持讀誦爲人演說。其福勝彼。云何爲人演說。

不取於相。上に「法相を生ぜず」と云ふよりして、こゝには單に「相を取らず」と言ふのは、蓋し我有らば則ち人有り、我有らば則ち衆生壽者有る。是の如き一切が有れば、そこに一切の法があることになる。故に此經には我人に相を取らないから法も亦無論のこゝである。

如如不動。如是に知り、如是に見、如是に信解することは皆如である。然し、如とする所あらば則ち相がある、如如ならば非如である、而して非不如である。こゝが無實無虚さいふ妙旨である。故に下の如の字は即住の謂であつて、上に能く住すさいふこと、それは不動たる所以である。

何以故。一切有爲法。如夢幻泡影。如露亦如電。應作如是觀。

經の主旨は即住即降伏といふ事に在るのであるが、上に相を取らず如如にして不動と云つて全經の語を總結した點は簡にして盡してゐる。又一切有爲の法云々の四語の偈語によつて之を結ぶと云ふことは經文の體例である。世人にして此の四語が金剛經の精義である如く心得るものもあるらしいが、稍しく佛法を解する者ならば、孰か一の空の字を知らないものがあらうか。何人も空の理は知つてゐるであらう。されば乃ち此の四語を以て無上甚深だなど、爲すものがあらうか。かくの如きは耳食の論であつて眞見ではないと思ふ。

佛說是經已。長老須菩提。及諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷一切世間天人阿修羅。聞佛所說。皆大歡喜信受奉行。(應化非眞分第三十二)

以上を第十一節とする。最後の一段は上下篇の總結である。

(注一)、松本文三郎氏、金剛經と六祖壇經の研究、三二頁—三四頁

(注二)、梵文、Max Müller 本、南條文雄氏、梵文金剛經講義三二五頁—三二七頁参照。

(注三)、春在堂全書本、俞樓雜纂第四十七、金剛經訂義其四。

(注四)、同書、金剛經訂義其五

(注五)、南條文雄氏、梵文金剛經講義三三三頁—三三五頁参照

(昭和三、一〇、八)